

死ねない女の奉仕(笑) 物語

エステバリス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この物語は性悪で不憫でぼっちで鉄ヲタで廃ゲーマーで（以下略

なんていう事実と適当な悪評がでっちあげた属性盛り盛りの女が往く、龍の物語である――！

なくんちやって。そんなの嘘っぱちですとも。

……嘘っぱちだよね？

目次

いつこめ 出逢えよ運命

1

にこめ やれよ解説

8

いつこめ 出逢えよ運命

貴方は信じるだろうか。世の中に人なら誰しも一度は憧れてみたりするものを持つている人がいたとすると。その人がよしんば、それを疎ましく思っている事を。

多分、実際に見れば解る。お金持ちはお金持ちなりに悩みがあるのだから。

……能書きはいい。なにを言いたいのか言つてやろうじゃないか。

「それにしても奇跡の領域を越えてますね、ミルフィーユさん。まさか新幹線に轢かれて生きてるだなんて」

「あつはつはー……身体の頑丈さには自信がありますからね。それに駅に入る直前だったので速度も言うほど出ていませんでしたし、原型とどめないくらいめっちゃくちゃにならなかつただけ御の字ですよ。カメラは碎け散りましたけど」

「はあ……いずれにせよ運よく拾い直せた命なんですから、暫くは絶対安静ですよ。それになにアホなことやってたんですか。新幹線のレールに一番近い電柱に登って新幹線撮影してたら足を滑らせてレールに乗って轢かれるって。本当になにやってたんですか」

「マジですみません……あの、絶対安静って具体的には何カ月くらい……」

「四年はくだりませんね」

「Oh……」

そう、ワタシは端的に言うとは死ねないのだ。これまで戦車や馬に轢かれたこともある。火炙りになったこともある。ついでに言うとは身体を真つ二つにされたこともある。

だが死なない。普通死ぬとか、死なないと生命体じゃないとか、そういうレベルの仕打ちを何度も受けてきたが、ワタシことミルフィーユが死んだことは一度としてないのだ。

まあ身体が治るのに実際は四年も必要ないだろう。というか数週間で全然十分だ。しかしまあ諸事情につき定住のない（家自体はある）ワタシは暫く病院の御厚意に甘えさせていただくのでした、まる。



そもそも、ワタシがどういう人間なのかを綴っていなかったことを思い出した。ワタシの名前はミルフィーユ、姓はない。あのおいしいおいしいスイーツと同じ名前だ。ワタシスイーツ大好き。とても嬉しい。

しかし、語ろうと言ったものの、困った。ワタシは忌々しいアンチクショウのせいで――の事を語れないのだ。語ろうとするとアンチクショウの術の影響で脳味噌が震え、言

葉にノイズが走るせいでワタシは——だった頃の事を語れない。語れるとするのなら、ワタシが——だったと知った上で——の名前を呼ばれた時だ。

ああ、五月晴れが憎々しい。

とりあえずあれから何日かして、暇になったので病院の方々は皆様ちよちよつとあれこれしてワタシに関する記憶はグッバイさせたので、ワタシは治りはじめの身体を動かしてそこら辺の公園で家でも広げようかなあと、思っていた矢先——

「ほらイツセー、こつちだよー！」

「待ってって！ イリナ〜！」

「——！」

眼と眼が合う瞬間なんとやら……というわけではないが、二人の幼子がワタシを通り過ぎて行つた瞬間、とても懐かしい匂いがした。

この匂い、間違いない……！ アイツの匂いだ！ どつちだ、先を行つてる子か？ それとも追い掛ける子か？

そこまで認識した瞬間、——の感情はここ最近の内で最高潮にまで昂つたのを感じた。

「——ちよつと待って！ その幼子二人！」

その時、ワタシはらしくもなく————だった頃のような獯猛な目付きをしていただろう。思わずワタシは今駆け抜けていった彼らに声を描けてしまった。

自分達の事であると理解した二人の子供はクルツと振り向いた。

「おねえちゃん、なに？」

「いっしょにあそびたいの？」

あ、ちよ、ムリ眩しい！ 幼児達の眩しい笑顔が確実にアカン事をしようとしてるワタシの心の奥底にぶっ刺さる！

しかし——のこの感情は抑えられなかった。未だ無垢な子供達の中に眠る獣の力を解き放ち、その行く末を俯瞰する……それは——だった頃からそうだし、ワタシも度々抑えられなかったのだ。

だがこれは、ああ、抑えることすら億劫だ。抑えてしまつたらワタシは死ぬ。それくらい昂りだ。

「うん、お姉さんキミ達と一緒に遊びたいなあ。お姉さん、キミ達みたいになちっちゃん子とお遊びするの……大好きなんだよね」

こういう小さな子は頼めば折れる。純粹であるが故に純粹な悪意も純粹な善意も、どれもただ『本気で頼んでいる』という風にしかとれないのだ。

「んー、どうするイリナ？」

「んとね、それじゃおねえちゃん、イリナとイツセーのぶかね！」

「はいはい、了解ですイリナちゃん」

「ダ〜メ〜！ へんじはさーいえつさーい！」

「さ、Sir Yes sir」

「よろしい！」

さあ、幼子解体ショーの始まりや。



さて、それから一ヶ月くらはは二人の部下をやつてるふりしてあれやこれやと猿知恵を働かせて二人に特訓を課していた。小さな子は純粹なので乗せやすいぜ。

「飴ちゃんやスイーツ、超カッコいいロボットの模型（塗装済み）」といったものをネタにすればアツサリ釣れる。ちなみに自作です。

やれレオ○ルドンが欲しくば激流に身を任せどうかしようとか、子供がいかにも好きそうなス○ライクフリ○ダムだとかを求めるならば探せ、そこに全てを置いてきただの、様々な方法を使って二人、イツセーくんとイリナくんを教育してきた。

そしてそう、一ヶ月だ。一ヶ月してようやくその時が来た。

「え、ええ〜!? ね、ねえおねえちゃん、このてなに?！」

『ほおう………今代の赤龍帝は結構な速さで目覚めたな………しかし、この歳で赤龍帝になるのは、苦勞しそう………ん?』

「すごいすごい、イツセーすごい！ カッコいい！」

そう、イツセーくんにはある力が眠っていたのだ。それは今の時代、セイクリッド・ギア神 器と呼ばれるもので、その名は赤龍帝ブーステッド・ギアの籠手。ある偉大なものの魂の宿る、それはそれは大層立派な籠手なのだ。

「ようドライグ、久しいね。ワタシの事覚えてるか？」

『……なるほど。そういう事か。今代の赤龍帝がこんな頃に目覚めたのはお前の仕業か』

「ま、そんなところさ。ちなみにワタシがキミを目覚めさせた理由は——」

『特にない、だろう？ この愉快犯め』

「あつはつはー。正解正解。ああ、でもこの子達と会ったのは正真正銘偶然だけ？」

眠ったままのキミが愉快で奇怪で仕方なく、ね？ それにしてもワタシが関わっていたことはわからなかったのかい？」

『目覚めるまでは相棒の内部以外の情報は全てシャットアウトされるからな。相棒も幼いせいで難しい外部情報は中に入れる前にカットされているのだろうな』

ワタシと籠手、ドライグが楽しそうに喋っているのを流石にイツセーくんとイリナちゃんが横槍を入れてきた。

「ね、ねえおねえちゃん……イツセーのてにあるのなに?! イリナにもでてくる!!」

「そうだよおねえちゃん! これとれないよ!」

ああ、近所迷惑だからあんまり泣かないで二人とも……まるでワタシが幼児誘拐の実行犯みたいじゃないか。

『そうだな、相棒。俺についてのこととコイツについてのことを教えねばならないな。なにせお前は図らずして赤龍帝の器となつてしまったんだ。こればかりは運が悪かつたと諦めろ』

「ドライグ、イツセーくんらは幼いんだから、もう少し解りやすく言ったほうがいいと思うけど」

『それを要約するのがお前の仕事だ。こんなことをやったのなら責任はとれ』

はいはいわかりましたよお、とやる気三十パーセントくらいで返す。ワタシの態度を見たドライグは露骨に舌打ちをしてからイツセーくんとイリナくんに可能な限り優しく、語りかけるような口調で話し始めた。

『いいか相棒、そしてその子供。俺は赤ウエルシュ・ドラゴンい龍ア・ドライグ・ゴツホ。そしてそこにいるそいつはミルフィーユ、かつて甘毒の龍妃セアダスと呼ばれた元・ドラゴンの人間だ』

ああ、ようやく、ようやくです。「私」の名前、呼んでくれたね？ 赤龍帝……

にこめ やれよ解説

「——夢、か」

目を覚ました俺は思わずそう呟いた。今から数年前、ドライグと出会って、彼女にこの道に引きずり込まれる理由になったあの日の夢を見た。

『起きたか相棒、ミルフィーユに言い渡された特訓の為の起床時間はもう過ぎているぞ』
「マジか……やっべえ。ミルねえに知られたらどうなるか解ったもんじゃないな」

『まあその時はその時だ。ヤツは気分屋だからな』

ドライグの声を聞きながら寝間着からジャージに着替える。ミルねえに改造された自室に備え付けてある洗面台で歯磨き、顔洗いと一通り済ませて下に降り、パンが三枚入った袋を持って一枚啜えながら家を出る。

「ドライグ、今日何曜日だっけ」

『金曜日だな。発展能力強化指南だ』

「うげ、よりにもよってそれかよ……」

準備運動を済ませ、溜め息混じりに走り始める。他に考える事もないので、俺は適当

にミルねえに色々教えられた日を思い出す事にした。



『ヤツの名は甘毒トリイズン・ドラゴンの龍妃セアダス。記録に存在する事のできない、智謀の龍』

「その通りですドライグ！ ワタシ、いえ私こそがアナタの天敵にして抑止力、三大勢力の不倶戴天の敵！ お菓子好きの綺麗な鉄ヲタお姉さんミルフィーユとは仮の姿、私の真の名はアナタの言う通り、甘毒の」

『長い』

「いけずう」

まあ実際ワタシも長すぎると思いましたけどね。私の本能がアナタと出会えた事が嬉しすぎたのです。許してください。

「とはいえドライグ、私の素性をこの子達に語ったとしてもワタシはドラゴンはおろか、三大勢力についてすら語った事はありませんよ？ いきなりその話をするのは早計ではないのでしょうか」

『む、そうなのか……』

完全にイツセーくんとイリナくんをおいてけぼりにしてドライグとお喋り。私をよく知る人達の中でもドライグは私が天敵という事もあり比較的対等に扱ってくれるから大好きです。

「お姉ちゃん……意味がわかんないよ」

「いや、あつはつは。ごめんごめん二人とも、今からしっかり説明するからね。……事実だから笑ってもいいけど、しっかり受け入れるよーに」

「はーい」

よろしい。幼子は正直だからおねーさん大好きです。

「では……こほん、まず二人とも。天使、悪魔、墮天使って知ってます？」

「知ってるよ、パパがきよーかい？ のせんしさんなんだよ！」

おおう、マジですかイリナくん、ワタシ初耳ですよそれ。一方イツセーくんはいい人とわるい人！ というような印象しかないようで、説明のし甲斐があるというもの。

「なるほどなるほど。では説明しましょう。イリナくんも復習がてら聞いてくださいね、いいですかイツセーくん」

二人のはーい、という返事を聞いておねーさん悶え死にそうです。ピュア最高、できれば二人ともずっとこのままでいてもらいたいものです。

「ではまずイツセーくん。天使とか悪魔とかはゲームの中の存在だと思っただけでしょうけど……マジでいますよ、悪魔とか」

「え？ そうなの？」

「ええいいます。私やドライグはその天使や悪魔の大敵、ドラゴンです！ あのカツコい

い龍ですよー」

「お姉ちゃんが？ ぜんぜん見えないけど……」

「いいんですうー、ワタシは諸事情で今はニンゲンだからしよーがないんですうー」

まあ確かに、籠手に成り下がったドライグとニンゲンに成り下がったワタシではドラゴンらしきなど粉微塵もないのは事実です。うん、説得力ない。

「そうですね……じゃあ、ドラゴンとまではいかなくともワタシが普通の美人おねーさんじゃない証拠を見せちゃいましょう。その不思議なポツケで解決してくれそうなた管を御照覧あれ」

ワタシが指指した方向に二人は注目する。ワタシ自身もその土管に目を向けて左指を弾く。すると――

「えっ？」

どちらが声を挙げたかはワタシにはわからない。イツセーくんかもしれないし、イリナくんかもしれない。あるいは両方？

これを使うとアンチクショウの呪いのせいで耳がおかしくなる。声の混濁―――声が意思を伝える信号から単語の羅列に変化する、と難しく言えるだろう。

ともかく、これで二人はワタシを少なくとも普通のニンゲンではないと理解しただろう。先程まで注目的であった土管は見る影もなく粉々になっていた。

「ワタシのいくつかあるうちの一つ。圧壊……これが一番直接的だから使ってみただ、どうです?」

「すごいすごい!」

「俺もやってみたいな! お姉ちゃんみたいになればできる!」

「いやはは、それは素質次第ですよ。ワタシだって好きでこんなことできるわけじゃないんですからね」

「いやー参ったなー! 小さい子に慕われるってすごい気分だなー! 楽しいわーもつとイロイロ教えてあげたいなー!」

「ま、それはそれとして。イツセーくんその籠手に眠った龍、ドライグの力は冗談抜きで凄い。ワタシのなんかよりも何十倍もの力が秘められているんだ」

しかしワタシは一転して真剣な風貌になる。お父さんが教会関係者とあればイリナくんにも選択の猶予は回ってくるだろうが、イツセーくんはドライグを宿した以上否が応でもこっちの世界に来てしまう事になる。

ワタシはドライグが大好きだし、ワタシを慕ってくれているこの子達も大好きだ。だからいつになく真剣な表情で二人に話し掛ける。

「それにドラゴンは不思議な事に『力』を集める傾向がある。それは本人の意思に関わらないけど、私もかつてその力を使ってイロイロやったからね、あるのは確実だ。つまり

「イツセーくん、キミはこの先必ず力を持たないといけない」

「だからワタシはキミが死なないようにキミを育てようと思う、とも付け足す。」

「イツセーくん、どうだい？ キミはいつか強くならなきゃいけない。それが今日とも

明日とも、何年後とも限らない。だったらその日がいつ来ても笑い飛ばせるように――

――強くなってみないかい？」

煽るような口調。小さな子供には自主性を重んじさせる事が大事だ。それが好きなこととか、やらねばならない事であってもそうやって自分から取り組まないと飽きてしまう。あとそんな鬼みたいな事を出会って一ヶ月の女性に強要されたという事実について数年後詰め寄られると強く出れないし。

イツセーくんは小さく、でも確かに力強く頷いた。うんうん、若い子はこうじゃないとね！

「イリナくんはどうするんだい？ キミが望むのならおねーさん、特別に特訓してあげるよー？」

「やる！ イツセーよりずっと強くなる！」

「いい返事。それじゃあまずは夕日に向かって、G o w e s t g o o !」

『……コイツ、明らかにドラゴンだった頃より人生楽しんでるよな……』